「衰退していく地域」で生きていくこと
―銅山町足尾での「老い」の語りを通して―

日本大学大学院　博士後期課程
三浦一馬

1　目的

本報告の目的は,「衰退していく地域」にとどまることのリアリティを明らかにすることである．過疎化，高齢化は社会問題として広く取り上げられてきた．過疎化をめぐっては，原因や対策，そもそも過疎はどう定義されるべきなのかなど様々な議論が行われている一方で，これまでの「人口増加型パラダイム」を成功とみなす政策観から転換すべきことも主張されている（徳野 2011）．また，炭鉱での閉山による地域社会の変動が人びとにどのような影響をもたらすのか，その体験が明らかにされてきた（JAFCOF 釧路研究会 2012,2013,2014,2015,2016）．

しかし，過疎地域でとどまることとはどのような体験なのか，これを個人レベルで明らかにしようとする研究は少ない．変容する地域のなかで生きてきた人びとの主観的な側面により注目するために閉山後も鉱山町に残り続けた高齢者に聞き取りを行い，地域の過疎化ともに自らも老いてきた彼ら/彼女らの語り，これを過疎地域にとどまる体験として解釈していく．

2　方法

調査地とした栃木県日光市足尾町は，かつて栃木県で第二の都市と言われたほど銅産業で栄えていた．しかし，1973 年 2 月の閉山以降，中心的な産業を失い，労働人口の流失に伴って急激な過疎化に見舞われ，現在もそれは変わらない．こうした状況にもかかわらず，足尾に残り続けている 60 歳から 86 歳の人びとに 1 回 1 時間から 2 時間ほどの聞き取りを行ってきた．

3　結果

聞き取りを通して明らかになったのは，変容していく地域のなかでそれを意味づけ，当たり前に暮らしている人びとの姿であった．本報告では，聞き取りに協力していただいた方の一人である A さんの語りを取り上げる．A さんは高校の教員として閉山の 10 年前に足尾に赴任してきて以来，ずっと足尾で暮らしてきた．定年後は環境教育や歴史研究など積極的に地域の活動に関わってきた．けれども，そうした活動を辞めた後は何もすることがなく家で過ごしているだけの現在の暮らしを自ら「怠惰だ」と評価し，老いに関して「70 歳を境に急激に老いを感じるようになった」と語る．こうした「老い」の語りを地域の変容と関連づけて解釈することで，A さんがどのように過疎を生きてきたのかを考察する．

4　結論

確かに，これまでの A さんの暮らしと比べると現在の暮らしは落ち着いたものになった．しかし，そうした暮らしの変化も地域の変容に伴って生じてきたのであり，そのなかでの A さん自身の生き方や自己は一貫していたように思われる．つまり，「怠惰だ」と評価する現在の暮らしにも A さんが地域の変容に折り合いをつけるような一定の意味づけがあると考えられる．過疎地域をめぐる議論では，過疎地域で生きていくことは外部の人間にとってみればネガティブなものと思われがちである．しかし，本報告ではそうした議論の前に「衰退」していくことの意味自体を当事者の体験から捉え直す必要性を提示したい．

文献

徳野貞雄，2011,「集落の維持・存続の分析枠組み―『T 型集落点検』から見えてくるもの」，福祉社会学研究 8，25 - 41.
産炭地研究会（JAFCOF），2012~2016,「JAFCOF 釧路研究会リサーチペーパー　vol.1~9」.